

報告書

団体名	福島中国伝統文化愛好会
活動名	中国洛陽太原小中学生訪福団招致事業
活動目的	10名の中国の小中学生を招へいし、2011年の東日本大震災・東京電力原発事故後の福島市の状況を自らが体験し知る機会をつくとともに福島市内の児童・生徒との文化交流をとおして友好を深め促進していく事で世界平和の種を子ども達の心にとどめる機会をつくること。
活動内容	① 日時 令和元年7月11日（木）～13日（土） ② 場所 福島市役所 大森小学校 信夫中学校 桃果樹園 福島民報社ほか ③ 後援 福島市・福島市教育委員会・福島市国際交流協会・福島市日中友好協会 参加者 大森小学校児童、信夫中学校生徒ほか ④ スタッフ人数 20名 ⑤ 対象者 小学生8人 中学生2人 引率者6人 ⑥ 具体的な活動内容 ・これまでも福島に居住する中国人との交流を定期的に行い、連携を取りながら訪中団の受け入れを3年前にも開催して情報発信を行ってきたが、今回は学校訪問を中心とした行程で子どもたち同士の交流をとおしてお互いを身近に感じてもらうことで将来にわたっての関係を築くことを目的としている。 ・中国河南省洛陽市、山西省太原市の小学生、中学生の代表を福島市に招致し、小学校中学校を訪問して授業見学・体験や給食と一緒に食べながら児童生徒とふれあうことでお互いの文化交流を行う。桃などの果樹園を見学して福島のおいしい果物を子ども達に食べてもらうなど震災後の福島市の状況を自らが体験する機会をつくる。宿泊は福島市の施設やホームステイを体験し、市民との交流の中で生活体験や食事会などを通して楽しい思い出作りを行う。 ・帰国後は自らの体験したことや福島市の復興状況を見てきたことなどを作文にまとめて学校で発表しあったり、中国の地元新聞社へ届けてたくさんの中国の方々に伝えてもらったりする予定である。なお訪福団の行程については下記のとおり ◆7月11日(木) 飯坂温泉、歓迎交流会、福島市立子山自然の家での体験宿泊 ◆7月12日(金) 福島市役所訪問、信夫中大森小体験交流、桃狩り・ホームステイ ◆7月13日(土) 企業見学(福島民報社)、日本食調理体験、送別交流会
活動の成果	・11日は飯坂温泉堀切邸で足湯体験、堀切邸見学と入浴の習慣のない子供たちが足だけを温泉につける体験はとても興味深く、長旅の疲れをいやしている心地よい体験となった。歓迎会では新潟中国総領事館劉宏副総領事、福島市紺野副市長を招き歓迎の式典を行う。中国メンバーの古典楽器の演奏や習字の実演披露では参加者から大きな拍手が送られ、食事会では日本料理の手料理を頬張る姿に、心配されていた「福島への不安」を払拭する体験となった。宿泊は福島市立子山自然の家を利用した。 ・12日は福島市役所の木幡市長へ表敬訪問を行う。市長との懇談会で福島市を心配して震災原発事故後の様子を質問、市長からは世界中からの応援で復興も進み、オリンピックでは世界の人たちを迎えることができるまでになった旨の説明を聞いた。続いて大森小学校、信夫中学校を訪問する。授業交流体験では中国で行われていない授業の体験をする（大森小では体育、信

	夫中では音楽)。給食体験では児童生徒に混ざって配膳から片づけまで一緒に行い給食も残さず完食していた。最後に交流会の意見交換では、「日本の子ども達がニイハオとみんなが気軽に声を掛けてくれたことがとても安心できた」また、中国の子ども達に対しては「自分の意見をはっきりと伝えることが上手だった」などの意見が出され、中国人に対する距離感が急激に近づいた交流になった。午後からは福島食材を食する「桃狩り体験」を行う。木になっている桃を取りその場で食することで福島の果樹は安心して食することができるということを体験した。宿泊は日本人の家にホームスティする。食事ではそれぞれの自己紹介や家族のことなど身振り手振りを交えて会話しながらここでも日本食の家庭料理を食べて楽しい時間となった。 ・13日の午前中はスカイラインなどの観光地やあづま運動公園、四季の里などの行楽地などホームスティ先の家族と共にドライブ、観光、ショッピングなどを行う。午後は福島民報社を訪問し「企業見学」を行い、日本の新聞がで上がるまでの流れを学習し体験した。昼食は福島民報社のホールにおいて「日本食作り体験」として講師を迎えてのり巻きをつくり、でき上がった太巻きを参加者全員で楽しみながら頬張った。最後の行事となった「送別交流会」では中国交流メンバー全員がこの3日間の思い出と感想を述べ合った。中国の子ども達も先生、保護者も福島の放射線被害に対する間違った認識をこの交流によって払拭することができた。またマスコミ等で報じられている日本と中国の関係について、実際に訪れて日本人と触れ合うことでとても日本人が身近に感じられた。もっと日本と交流をして真実を知ることが大切である。そして必ずや日本を再び訪れたいし今回出会った日本の方にも是非中国に来てほしいと、別れを惜しむ涙を流しながら再会を誓い合った。訪問先の学校の先生方やホームスティ受け入れ家族などの協力を頂いたからはこのたびの企画を大いに評価しており、必ずや再会できる機会を作ってほしいとの声が寄せられた。
活動を実施 する課題	・今回の企画はできるだけ子ども達の交流の時間を取った計画としたが、学校での滞在時間は2時間程度だったので、まだまだ交流時間が不足していたように思える。今後は子どもたち同士が未来において連携をとれるような企画が必要である。また、今度は中国を訪れたいとの声に答えていきたい。 ・今回のメンバーを募るに当たって、福島の風評被害のために今回参加できなかった子ども達が多数いたと伺った。その子供達にも福島の真実の姿を見てもらえるようにアピールしていく事が今後の課題である。

(信夫中学校での給食体験)



(送別会)

